
ジャス・ザ・ライトニング

切子Q Bィ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ジャス・ザ・ライトニング

【Nコード】

N9975T

【作者名】

切子QBィ

【あらすじ】

ファンタジーVRMMO世界「ミドガリア」に大量のユーザーが閉じ込められて、十年。

NPCを遥かに凌ぐ廃人級ユーザーは「プレイヤー」と呼ばれ、NPC達からは畏怖の対象となっていた。

思うままに振る舞う一部のプレイヤーにより世界は緩やかな荒廃を迎えていた。

主人公、ジャスは記憶喪失のまま、その世界で目を覚ます。ただし、彼の姿は人のそれではなかった。

V R M M O の『世界』において、人間とはプレイヤーか、それとも N P C か？

史上最強の N P C、ジャスは果たしていかなる答えを導き出すのか？

踏みしめるは電子の大地。0と1を従える廃人共が牙を研ぐ。

ヤツに触れるな、白銀の鋼をまとうあの男に。

ヤツに挑むな、無双の右腕を持つあの男に。

ヤツを呼べ、世界に絶望したのなら、絶望を砕くあの男の名を。

ジャス・ザ・ライトニング、それがこの世界をさまようヤツの名だ。

第一話「起爆」 チャプター1（前書き）

思いつきで書きました。

少年漫画の読み切り感覚でお楽しみ下さい。

第一話「起爆」 チャプター1

深遠の黒「アビス」、光輝なる炎「プロミネンス」

——俺……は、

駆け抜ける電炎「プラズマ」、突き抜ける断片「デブリ」

——ここは……どこ……だ。

遙か遠くで、星の瞬きが見えた。保持出来ない熱、しかし絶対零度を感じ出来る肌を彼は持たない。音は無い。まるで音という概念自体がないかのような静寂。

——……うつ、あ……墜ちるッ!!

突如反転する視界。それまで上も下も無かった彼に訪れる落下、いや、まさに墮天とも言える感覚が走る。

「……戦って」

——誰だッ!

頭の中に響く声にうろたえる。その声は女の声。切実な祈りが籠もる、助けを求める悲哀の叫び。

「戦って下さい、人と、世界と、そして救って、彼らと世界を」

——世界？、彼ら？、人？

疑問に応える者は無く、墮天の加速は更に最高潮に達する。

——お、俺、は……

——誰だッ！？

彼の放った最もシンプルで、最も深遠に近い問いかけも虚空の宙に散っていく。

そして流星は空を割り断つ。

——……なんだこりゃッ！？

——おーい、マッコイの爺さん、何か見つかったのか……なんじゃこれ？

——ふむ、金属っぽいのお、人の下半身みたいじゃが。

——なんか逆立ちしてるみたいだなあこれ。なんかの像か？

——とりあえず、掘り出してみんべえ。

——…ここどこだ？

彼が目覚めたのは薄暗い一室。荒い造形のレンガで造られた壁や天井、なにやら武器や日用品など雑多な種類の金属製品が並ぶ。

——ここは……工房か？

なぜ、そんな言葉が浮かんだのか、そもそもそんな知識があったのか彼にはわからなかった。

ただ、知識的になんとなく、ここがそう判断する所だと思った。

——…俺が寝てる場所は…

頭の中の粘つく薄もやを振り払う。自分が何か固く冷たい物に乗せられていることに気づいた。

——これは……金床？

「ッふんッ！！」

——えっ？

次の瞬間、彼の顔面を衝撃が襲った。

「——いっでええええッッ！！」

「いっや、ワリィワリィ、てつきり鉄クズかなんかと思ってよう！」
豪華な白髭を生やした古老、ゴーグル付きの帽子が似合うマッコ

イが豪快に笑う。採掘民ドワーフ独特の百五十センチ程の背丈とアンバランスにはちきれそうな筋肉。太い胴回りにはいい色合いに使い古した革のベルトが巻きつく。

太い腕に走る幾つもの古傷が数々の荒事を逞しく、陽気にくぐり抜けた事を知らせていた。

「だからって金床乗っけて鑄つぶすんじゃないやねえよ！」

ベッドにて上体を起こしながら『彼』は怒鳴る。

潰し用の巨大ハンマーの一撃を受け、絶叫した所を助けられたのだ。

今彼のいる場所は、マツコイをリーダーとする採掘団の使う小屋の一室だ。

窓から小規模の露天彫り――鉋脈を真上からすり鉢状に掘り進む採掘方――にされた鉋山が覗く。

「ハッハッ、しょうがねえじゃろ、なんかレアな金属かと思ったらとりあえず調べてみるのがドワーフのサガってもんよ！」

「だからってハンマーでぶっ叩くなよ！」

部屋の片隅に長柄のハンマーが立てかけてあった。もはや鉄塊と評すべき四角の打撃部分、柄の部分は僅かに曲がっている。

「いやいやあんたも大したもんだ。ワシのハンマーに耐えて平気な顔してるんだから。むしろハンマーの柄が歪んじまって、自信喪失だあ」

快活に、岩の老人が笑う。

「よく俺死ななかったな……」

「いや、正直あんたのなりなら多少のことは平気そうだがね」

「えっ？」

言葉の意味がわからず一瞬たじろぐ。

——そーいや俺、どんな顔してたんだっけ……？

「お、俺は……」

走る頭痛、頭を抱えようと左手を上げる。

——あっ

左腕が無い。肘から先がすっぱりと消失していた。

「あ、腕、腕が……ッ！」

「……あんた、自分の姿がわからんのか？」

マッコイが抱えてきた、全身を写す鏡に気づく。

「……こ、れが、俺？」

その姿を良くみるため、ベッドから立ち上がり、全身を写す。

身長は百九十センチ程。細身かつ、締まったシルエット。上半身にポリウームのある逆三角型の体系。

服は着ておらず、くすんだ銀の装甲が全身をくまなく覆っていた。釉薬のように滑らかな表面が鈍く窓からの光を反射する。

引き締まった長い四肢、いや三肢。調和を崩すように欠損した左腕は今頃どこで何を掴んでいるのか。

そして、その顔は。

「これが、俺の、顔？」

例えるにしてもこの世界に置いて知るものは数少ないであろう、フルフェイスのヘルメットに酷似した頭蓋。

顔の位置、ヘルメットならば覗き窓になる部分にはスモーク状、半透明のガラスのような物で覆われている。

その窓の奥には蒼い鬼火の如き二つの輝きが淡く灯る。

——俺は……

「化け物……」

無意識に、最も正確に己を評した言葉を呟く。少なくとも、機械か何か、およそ人のカテゴリーに入る容姿ではない。

「しかし見たことねえ顔付きだけどあんたどこの種族だい？」

「え？ いや、あの……俺、こんな顔してるんだけど、なんとも思わないの？」

またも豪快に、古老が笑う。

「この世界、種族なんて山程いるんじや。いちいち変わった種族で驚いてたらハゲちまうよ。大体、男は顔じゃねえ、ここと」

バシリと己の右腕を叩く。

「ここよッ！」

ドンと勢いよく彼の胸を叩いた。

「あ、ああ、そうだな…… なあ、俺、記憶が無いみたいなんだが。自分の名前もわかんねえんだ」

ピタリッとマッコイの笑いが止まる。顔が青ざめていく。

「……ひょっとして、ワシのハンマーのせいかな!?」

「え、いやうん、正直よくわかんねえんだけど」

たぶん違う気がする。

「こりゃまずった! どうすべや!」

頭を抱えだすマッコイ老。その様は、かなり暑苦しい。

「爺ちゃん! スープ持ってきたよ!」

快活な声が響く、軋んだ音を立て、ドアが開いた。

——誰だ?

年は十五才程だろうか。百四十センチ程の背丈、ドワーフ族にしては細めのシルエット、青の採掘用作業着にその身を包んでいる。栗色の髪を後ろにまとめ、卵型の輪郭と穏やかな目元、可愛らしい鼻梁が伸びる。頬に土の汚れがついていたが、麗しい少女だった。

「おお、エルリア! スープはこっちに置いてくれ!」

嬉しそうに、マッコイが片手を上げた。

運んできたスープを傍らのテーブルに置き、エルリアと呼ばれた少女はマジマジと彼を見つめた。

「……えーと、何か?」

ニッと快活に少女が笑う。八重歯が光った。

「爺ちゃん、こいついくらで売れるかな! あたしの見立てならレ

アメタルっぽいし、かなり高値で……」

「……あ”あッ!？」

入れられた紅茶を啜りながら、少女は語る。

「だーから、こいつは何か仕組みあるみたいだし、つぶさないで、単体で売ろうよ!」

負けじと祖父も孫に反論を返す。

「ドワーフだったらまず何の金属が知ってから売るんじゃない! 研究無くして進歩はないぞ!」

「――はあああ」

静かにため息をつき彼は顔を上げた。

「つ、ま、り、ッ!」

勢いよくテーブルを叩く。

「俺は、ある朝いきなりすぐそばの採掘場のど真ん中に逆さまに埋まってたと?」

マッコイ達から聞きたいきさつを整理する。彼を見つけたのはマッコイ当人。

意識の無い彼を「とりあえず見たことないレアメタルみたいだか

ら潰して調べるべえ」と作業にかかった。しかし孫娘は仕組みにも価値があると判断。このまま売る案を押す。

研究の情熱に燃えるマッコイは潰しを孫娘に秘密にして強行、現在にいたる、と。

「あんたら、おかしいだろ！潰すなよ！売るなよ！値踏みするな！」

「ふん、うちの鉱山で採れたもののクセに意見する気？」

エルリアが彼を睨みつける。勝手な真似は許さないと視線で訴えていた。

「別にあんたに意志があるなら、指図はしねえよ。ただ、あんたの体の金属は見たことねえ種類の金属だ。ちよつと削ってサンプルを……」

「断るッ！！」

間髪入れずマッコイにNOを突きつける彼。いくら何でも体を削られるのはイヤだ。

「で、あんた記憶も名前もないんだっけ？難儀だね」

エルリアが問いかける。さすがに記憶喪失には同情してくれているようだ。

「俺には、なんつか、はっきりとした記憶が無いんだ。名前も、体験の記憶も無い……」

空虚感が彼の胸を疼かせる。己とは何か、それを物語るアイデンティティとしての記憶が彼には無い。「自分とは何か」という終わらぬ問いを、常に魂に刻み込まねばならないのだ。

「そう、じゃあ名前をつけて上げるわ。誰にだって自分と世界を分

ける記号が必要だものね」

「名前……か、ああ、なんか覚えやすいやつを頼む」

正直な所ありがたかった。自分で自分を名付けろと言われても、
途方にくれてしまうだろう。

「そうね、あんたは……」

エルリアの瞳にイタズラ好きの童子のそれのように輝く。

「ジャスね！ 覚えやすくていいでしょ」

「……ジャス？ あの、由来はどういう……」

「そりゃもちろん！」

エルリアが胸を張る。低い背丈の割りにはなかなか豊満なバスト
が揺れた。

「ジャンク・オブ・スティールの略でジャスよ！」

直訳すれば、鋼の鉄クズ、いや、鋼鉄のクズか。

「はあ！？ ふざけんなお前！」

思わず叫ぶ彼、しかしエルリアは威に介さずスープの皿を押し付
ける。

「まあ、これでも食ってちょっと休めば思い出すんじゃない？
じゃあね！」

足早にエルリアは部屋を出ていった。

「あんたの孫娘、一体なんなんだ？」

スープ皿を抱えながらも表情を出せるならかなりしかめっ面
になっているだろう彼Ⅱジャス。

「あの娘はあの娘なりに考えたんじゃないよ。なんだったらワシの考え
た名前『謎鉄くん一号』とかどうじゃな？」

「断る」

ネーミングセンスは代々受け継がれる物らしい。

——しかし、これどう食べばいいんだ？

問題は食べ物ではなく自分にある。フルフェイスヘルメットのよ
うな自分の顔には口らしき部位が無い。

——こう、か？

脳内で大きく口を開くイメージ、口元近くのパーツが大きく観音
開きに開く。内部には鋭い牙、乱杭歯の覗く生物学的かつ野性的な口、
というかアギトがある。

「うおっ！　すごい口じゃな」

マッコイが驚きの声を上げた。

——これでいいのか？

恐る恐るスプーンですくったスープを入れる。

——あ、味がする。

ベーコンの脂とスモーク、野菜の旨味、豆の食感、塩味、味覚を
通じて情報を実感する。

「結構旨いな」

マッコイが得意満面に笑う。本当によく笑う男だ。

「作ったのはエルリアだからな！　婿さえ見つけりゃええ嫁になる
んだが」

「……あの性格だと婿がなあ」

「あれでも、かなり明るくなったんじゃ。……三年前に息子夫婦、
エルリアの両親が死んだ時は何も喋れんようになったてな」
それまでの陽気さとは違う、どこか遠い目でマッコイは外を見て
いた。

「……いや、うかつだった、すまん」

いたたまれなくなり、謝ってしまう。なんとなくそうした方がい
い気がした。

「両親はなんで亡くなったんだ？　事故か」

「事故、か。ある意味じゃそうかもしれんな。のうジャス、あんた『プレイヤー』も知らんのかな？」

「プレイヤー？」

言葉を胸中で反芻するがまったく覚えが無い。

「知らんみたいじゃな。十年ほど前から現れはじめた異常な能力を持つ者たちの事じゃ。自分達のことをプレイヤーと呼び、プレイヤー以外は人間ではないと乱暴を働く一派がその中におってな。三年前に、レアメタル目当てにエルリアの両親が殺されたんじゃ」

「プレイヤー以外は人間じゃない？」 奇妙だ。プレイヤーが人間で無い、人間以上というニュアンスならわかる。だが人間とはプレイヤーのみとは一体？

「よくわからんがそう言い張っておる。プレイヤーは痛覚や味覚が無いそうだな。それが人間の証明だといっておるんじゃよ。なんにせよ、現れはじめた多数のプレイヤーのせいで、この世界はすっかり混乱しちまったんじゃ」

異常な能力を持つもの達がそれぞれ好き勝手をやりはじめた事により国力の衰退が起こったのか。

「中にはもはや天災と呼ぶしかないほどのプレイヤーもおってな。もうアイツらは事故か災害と諦めるしかないもんかもしれん」

「……それで、エルリアの両親を殺したプレイヤーは？」

古老は悲しげに首を振った。

「見つからん。結局行方知れずじゃ」

この明るい老人も、悲しみを乗り越え生きているのか。

「そんなとんでもない者がこの世界に……んっ？」

突如、ジャスの脳裏に感覚が走る。視覚や聴覚とは違う、もっと広い範囲を感知する感覚。ここから離れた場所にいる明確な戦闘意識を持った者がいるという直感。ジャスは自分にある種の非常に広

範囲な空間認識能力があることを臆気に理解した。——それはこのジャスの体が、本来は地上のような狭い範囲を舞台に戦う存在ではなかったことを意味するのだが、今現在ではそれを理解する者も知る者もない。

「おい、マツコイ爺さん、ここに誰か近づいてるぞ！ 敵みたいだ！」

突然慌てだすジャスにマツコイが驚く。

「あんたここからどこを見てるんだ？」

「なんだっていいだろ！ とにかく何かがくるんだ！」

直感が、ジャスの脳髓を貫いていた。

「だから何が……」

ズズンッ！！

走る衝撃に、壁がパラパラと少量の破片を落とす。

「なん……じゃ、敵襲か！？」

壁のハンマーを軽々と抱え、ドアへ近づく。

「ジャス、あんたはここで大人しくしとけ！ ヤバくなったら人をよこすからそいつと逃げるんじゃない！」

「お、おい！」

ハンマーを担ぎ、駆け出すマツコイ。ジャスの制止も聞かず、その顔には決死の意志が見えた。

誰も居なくなった部屋で、ジャスはただ壁を見つめていた。何か危機が迫るのはわかる、だが自分には戦う術があるかさえわからず、ただここで敵に震えるしかないのだ。

——俺は何ができる？ 俺は、何者だ？ 俺は——誰だ？

問いに応える者は無く、恐怖を癒やす存在も無い。ジャスはただここにいてしかできなかった。

そう今は、まだ。

チャプター2

荒涼とした砂漠地帯にあるドワーフ自治鉱脈掘削所。照りつける太陽はそこにある物を平等に焦がす。

現在、敷地内に侵入した一団は見張りのドワーフ兵士と交戦しながら、密集隊形のまま、防衛網を突き破っていた。

「さあて、楽しくやろうかお前らッ！」

筋骨隆々な全身甲冑の二十人ほどの兵士達、装備に共通性が無いが、その身のこなしと迅速さは明らかに手慣れた傭兵の動きだ。

しかし、彼らには先ほどの声のような陽気さは微塵も無い。みな緊張と恐怖を抱えちゃ表情のまま前衛として壁を勤めている。

激を飛ばした声の主はその壁の最奥に居た。

長い金髪の髪と不自然さを抱くほど人形のように整った美貌。

豊満過ぎるボディは例えるならバランスを欠いた砂時計。その体型を覆うのは黒いビザールを基調とした扇情的な鎧。急所どころか、服として隠すべき所もロクに隠していない代物だ。さらにその上を血のように赤いローブを羽織っている。

はつきり言ってかなりの場違い。見た目だけなら戦場ではなく、酒場辺りにいるべき人間だろう。

しかし、その声は紛れもなく野太い男の声。

声だけではない。歩き方や身のこなしなど、その動作は中年の男それに近い。周りを囲む屈強な兵士たちはみなこの怪人のみを恐怖している。

「ドワーフ印のタル型マトをカモ撃ちするだけの簡単なお仕事だぜ、

金が欲しけりゃとっとと済ませろよッ！」

兵士の放つ中階位中距離魔術である火球が一人の非戦闘員のドワーフに直撃、叫びを上げて倒れ伏す。

怪人、マヘリアを後衛にしているのはきちんと訳がある。

「プレーヤー」であるマヘリアの職業は攻性魔術師。しかもかなり高レベル。「プレーヤー」内ならば準廃人級と目される能力だ。戦士役が盾として外に立ち、マヘリアの援護射撃を中心とする陣形が彼女の能力を最も生かし、なおかつ彼女が最も安全な戦闘法だからだ。

「オラオラオラッ！ 頭出せ頭！ キレイにぶっ飛ぶイカした頭をな！」

黒手袋に包まれた腕をかざす。手のひらから生まれた小さな火球が、一瞬で膨張、三メートル程になる。放たれた巨大火球はドワーフの宿泊小屋に直撃、跡形も無く燃やしつくす。

「たあのっしいなあ、オイ！ 笑えよお前ら、そうだろ！」

マヘリアが放つ高位中距離魔術『ファイアボールlevel5』彼女の持つスキル「詠唱短縮」「魔法攻撃力二倍」により並みの傭兵を遥かに凌駕する破壊力となる。

周囲を囲む兵士達がみな歪んだ笑顔を浮かべた。相手は高レベルのプレイヤーだ。うかつに逆らえばどうなることか。この依頼でも依頼主がこんな壊れたプレイヤーだとわかっていれば請け負うことなど無かったろう。

「おい、なんで笑ってねえの、お前？」

「……へ？」

唐突話かけるマヘリア。

「なに、笑いたくねえの？」

「え、いや、あの」

その目は穏やかな、静かな表情。それはまるで、

「じゃあ死ね」

虫を見る子供。

一瞬で発生する熱量、名も無き兵士を舐めるように燃やし尽くす。煙を上げる体が崩れ落ち、動かなくなる。やがて、崩れるように光り、欠片も無く消滅していく。

「お前ら見たかー？ 人間様の言うこと聞かないとこうなるからなー？ セコセコ働けよNPC共ー？」

マヘリアの忠告を兵士達は無言で受け取り、胸に刻む。「逆らえば死ぬ」そう覚えた。

——なんだ、今のは！？

爆発音と衝撃にジャスの体が固まる。逃げ場の無い戦いの気配が漂う。

——どうなるんだ……俺には戦い方なんて……

記憶は無い、名前さえついさっきまで無かった。その上で命のやり取りをしなければならぬのか？

——イヤだ、死にたくない。何も知らず死にたくなんかない！

バンッ！

ドアが開く。そこから現れるは、太ましい体躯のドワーフ兵士。しかしその体はかなり傷ついていた。

「ぐ、あ、」

息も絶え絶えにジャスのベッドまでにじりよる。流れる血が床にたれた。

「おい、怪我しているのか！？」

ジャスの心配を制し、ドワーフ兵士の男は話出す。

「い、いいか、よく聞け。プレイヤーがレアメタルを狙ってここを襲ってきた。抜け道を教える、だからそこを伝って逃げるんだ……」

「わかった、あんたは俺が担ぐから……」

しかし、差し伸べられた手を男は止める。

「俺はいい、もう駄目なんだ……」

その指先がゆっくりと量子化、光となり薄れていく。

「なんだ……？　なんで消えちまうんだよ？」

哀しげに男はジャスを見つめた。

「ああ、あんた知らないのか。この世界じゃ死んだやつは光になって消えちまうんだ。デリートとかロストとかいってな」

「手当て、手当てをすれば……」

優しげに、男は首をふる。

「もう駄目なのさ。なあ、あんた頼むがある。聞いてくれ」

「……なんだ」

「今マッコイの親方とエルリアの嬢ちゃんがプレイヤーの一団と戦っている。なんとか抑えているが不利だ。いずれやられるだろう」

「俺も戦った方が……」

「いや、ちがう。せめてエルリアだけでも連れて逃げてくれ」
男の足がゆっくりと透けていく。

「あの娘の両親が死んだのは聞いているか？」

「ああ、マツコイの爺さんから聞いた……」

「俺はその両親の護衛だった。でも護れずにこうして生き延びちま
った」

「そうだったのか……」

この男は無念を抱えて生きていた。

「でもな、あの娘は俺を責めず、真っ直ぐに育ってくれた。だから
せめて護りたいんだ」

それでもなお、力足りず死んでいく。それが現実だ。

「だから頼む。俺はもうダメだが、あの娘だけは助けてやってくれ」
それでもなお、しなければならぬことが有る。

「――俺は記憶が無い、何ができるかさえわからない」

「出来るさ、お前はまだ生きているんだ」
ならば想いと魂を誰かへ伝えよう。

「――ッ！ ……わかった、エルリアを絶対に護る」
それが生きるということだから。

「――すまん」

静かに、消えていく。

「あんたの……名前は？」

消滅の光の中、男は静かに微笑んだ。

「ウィルバー、さ……」

音を立て、彼の斧が床に転がる。再び、ジャスしかない部屋となった。

「ウィルバー、……ッ!?　ぐ、が、」

頭に痛みが走る。右手を添えながら、鈍痛に耐えた。

『――戦って』

――な、んだ?

『――戦って、人と世界と』

――この声は……

聞き覚えがある。遥か彼方で聞いた声だ。

『そして守って、彼らと世界を』

それは哀しげな女性の声。

――ああ、わかったよ。

何と戦えばいいのか、それはまだわからない。だが、何を守ればいいのか。それを知ることができた気がする。

ジャスはベッドからゆっくりと立ち上がった。

「――ぬおおおおッ！」

叫びと共に、マッコイの体が宙を舞う。地面に落ちて転がっていく。

「爺ちゃんッ！」

エルリアの悲鳴、右足に傷を負っていたが、小型の斧を杖にしなから辛うじて立っている。栗色髪は誇りにまみれ、作業着には無数の傷が走っていた。

「だからさあ、レアメタルどこに締まったか早く言えよNPC」

マッコイを魔術でいたぶりながら、マヘリアは楽しそうに質問を重ねた。

「――じゃないと今度は孫の方にいくよ？」

「……や、止めろ！ 孫には手を出すな！」

倒れながらも、マッコイは必死に制止する。

「お前、父さんと母さんだけじゃなく、爺ちゃんまで！」

「んー？ 父さんと母さん？ ……ああ、お前三年前のガキか」

エルリアにはマヘリアに覚えがあった。忘れられるはずが無い。

三年前に自らの両親を奪った悪鬼の顔だ。

「口を出すなエルリアッ！ ……プレイヤー、レアメタルのインゴットの場所は教える。だから孫には手をだすな！」

上体をなんとか起こしながら、叫ぶマッコイ。たくましい身体には無数の新しい傷が浮かぶ。

「いい心掛けだあ！ じゃあ案内して貰おうか」

マヘリアの細腕がマッコイの顎を掴む。

「それ」

「ぬうおっ！」

百キロをゆうに超えるマッコイの身体が五十半ばほどの重さしか

ないマヘリアに片手でぶら下げられた。

「魔術師だが、strengthもそこそ鍛えてあるんだぜ？」
マッコイをおもちやのように引きずりながら、マヘリアは兵士に指示を出す。

「じゃ、お前らはあの孫と遊んでやれよ。死なない程度にな」

「っ！　ぎ、ぎざ……」

そのままマヘリアは立ち去っていった。

「爺ちゃんッ！」

後を追おうと足を引きずるが、兵士に押し止められる。

「どけえ！」

腕を振るうが、支えにした斧を蹴られ、転倒。顔を打った。砂利の味が口の中に広がる。

立ち上がろうと身を起すが、支えの腕を蹴られまた倒れる。

「キャッ！」

「大人しくしとけよ、小娘！」

兵士達に下衆な笑いが浮かぶ。圧迫された人間が、ストレスをぶつけていい存在を見つけた時のあの表情だ。

「お前らなんか、お前らなんかプレイヤーに従ってるだけのゴミじゃないか！」

倒れながらもエルリアの眼はまだ死んではない。

「なんだとッ！」

一人の兵士がエルリアを踏みつける。執拗に、何度も。

「いいか、神なんかいねえんだ！　力のある奴になるか従うかしなきゃ終わりなんだよ！　力の無いお前らを助ける神なんかいないんだよ！」

――父さん、母さん、爺ちゃん、

エルリアの頭の中で、大事な人の顔が浮かぶ。痛みはどこか遠くに行ってしまった。

——悔しいなあ、仇一つ取れないなんて……
恐怖は無い。ただ悔しかった。自分の悲しみを伝えること無く終わることが。

「おいっ」

走る銀色の影。頭上の兵士が、音も無く吹き飛ぶ。地面にバウンド、ゴロゴロと転がっていった。

——なにっ？

エルリアは太陽の光に目を細めながら、兵士を殴り飛ばした乱入者を見つめた。

細く引き締まった長身。

欠落した左腕、

滑らかに輝く銀色の全身。

蒼の鬼火が一对輝く。

「……あんた、ジャス!？」

小屋にいるはずの珍客が、外に出ている。

「あんたなんでここに……」

「ウィルバーに頼まれた」

静かに言い放つ。

「え、じゃあウィルバーさんは……」

「……………」

「……そう」

ジャスの沈黙にエルリアも全てを悟った。

「とにかく、ここを出るぞ、立てるか？」

エルリアへ右手を差し伸べた。

「待って！ 爺ちゃんがプレイヤーに……」

「っ！ なん……ぐわっ！」

突き刺さる衝撃波にジャスの身体が大きく吹き飛ぶ。傍らの小屋の壁に叩きつけられた。追撃の衝撃波がもう一発ヒット、壁にめり込む。

「そのまま押し込め！」

兵士達が次々と魔術を発動、無数の火炎弾が小屋に直撃していく。正体不明の外敵に対し、最も有効な攻撃。つまり火力による封殺だ。

瞬く間に炎上する小屋、炎の影にジャスが消える。

「ジャス————ッ！！」

エルリアの叫びが、風に溶けた。

次の瞬間、ジャスがすぐ目の前まで、低く腰を落とした体勢で立っていた。右拳に光が集まり赤熱化していく。

「え……？」

オオオオオッ！

咆哮とともに右腕が一閃、技術もヘツタクレも無いあっけないほど単純なボディブロー。

しかしその一撃は、装甲を瞬く間に貫通、兵士の胴を串刺しに突き抜けていた。

飛び散っていく破片、モザイク状の構成片が散らばる。

「あ、が、」

兵士の体が急速に薄れ、消える。一瞬にして上限体力を超えた攻撃をうけ、瞬く間にロストしていく。

「神、か」

そのまま姿勢を変えず、ジャスは呟く。それは荒野に吹く風のような、虚しさを含む呟き。

「神ならいるぜ、————死に神だがな」

「く、クソ！ やれ！」

掛け声と共に両サイドより兵士が迫る。挟み込むように奮われる剣。

無言のまま、ジャスは右拳の打ち下ろしで眼前に迫る剣を兵士の背骨ごと一瞬でへし折る。そのまま背後へ回し蹴りを一蹴、もう一人のこめかみを打ち抜くように蹴り碎いた。

二人の兵士は同時に倒れ、同時に光の粒子へと変換、ロストしていく。

それは単純かつ明確な力の違い。武道家やムンクのような徒手格闘の技術は一切見えない。武器どころか左腕さえ無い今の状況がハシデにさえならない。

それほどまでに圧倒的な力とスピードがジャスにはあった。

——これが……俺か

奪った存在の重さを噛み締める度に己が力を強く確信する。

「う、撃て！、近接じゃない、遠距離で仕留めろ！」

ジャスに向かい、隊列を組んだ兵士達の攻撃魔術——無数の光球や火炎弾、衝撃波——が殺到していく。

——避けるか？ ……いやだめだ！

ジャスの脚力なら回避は可能、しかし後ろには傷ついたエルリアがいる。

——ままよッ！

降り注ぐ火炎弾や光球を右手一本で受ける、防ぐ、散らす。一歩も退かず迎え撃った。

「ジャ、ジャスッ！」

エルリアの悲痛な叫びも、魔術の轟音に掻き消える。それほどに数に任せた飽和攻撃。

——…ぬるいな。

視界を埋め尽くすほどの魔術攻撃。高熱と衝撃の嵐。そのただ中にあっても、ジャスの思考に危機感は無かった。

なにせまったく攻撃が効かない。それほどに白銀の装甲は頑強だ。

——この視界の隅にチカチカしてんのは一体なんなのかね？

先程の戦闘に入ってから、視界の隅を半透明の文字が埋め尽くしている。combat modeという文字や緑のactiveや赤のerrorという文字が端のほうに整列した項目ごとに並んでいた。

——errorとかactiveとかどういう意味なんだ？ ability 50% downてなんか意味わかんないけどすげーやな印象がするんだけど。

とにかく、反撃のために前進を開始する。

攻撃の嵐の中、平然と進み始めるジャスに兵士達の顔が歪む。いかなる攻撃も、この魔人には通用しない。

やがて、たどり着いた先、必死に魔術を撃つ前列の兵士へ無造作に腕構える。

「フッ!!」

ぞんざいに振るわれる右拳の一撃。グシャリと首をへし折られ、

回転しながら横に飛んだ兵士が宙でロストしていく。

「ひ、ひいい！」

一気に連携が乱れた。無我夢中で連射する者、背中を向け逃げる者、剣で切りかかる者、いずれにしてもジャスの脅威にはならない。

殺戮の風がただ吹き荒れる。

切りかかる兵士を赤熱化した手刀で真横から両断。

照準をつけるより早く、拳を叩きつける。

逃げる背中へ、跳び蹴りを突き刺す。

三肢で出来るあらゆる残虐と殺害が砂塵とと共に乱舞する。

僅かな時間ののち、その場に生きている者はジャスとエルリア以外には居なくなっていた。

——……俺は、何者なんだ？

十数人の兵士達はすでにロストし、消え去っている。ほとんど無我夢中でした行為だ。「エルリアを守らなければ」それだけしか考えられなかった。

——殺し過ぎだよな、こりゃ……そうだ、エルリアは無事か！？

「エルリアッ！ 大丈夫か！」

叫びながら振り向く。先程と同じ、足に怪我をしたまま座りこむエルリア。しかしその顔には兵士達を前にしても浮かばなかった表

情が張り付く。

即ち、恐怖のそれだ。

——そう、か。俺は、

彼女へ伸ばしかけた手を下げる。近づいてはいけなさと無意識に悟った。

——化け物なんだ……

「なーにやってんだお前？」

下衆な声が響く。声の方向には性別不明の怪人、マヘリアが立っていた。

「なんか、そっちでコマ共の反応が消えたからどうしかと思えば、戦宙機型とはけっいたいなヤツがいたもんだ」

マントを風になびかせ、赤い唇を歪ませながら、禍々しく嗤う。

——……戦宙機型ってなんだ？

「……お前が『プレイヤー』ってやつか？」

ジャスは注意を払いながらプレイヤー、マヘリアを観察した。見た目だけは女性だが、その雰囲気は男だ。

「おい、お前、NPCか？ それともプレイヤーか？」

唐突なマヘリアの質問に一瞬、虚をつかれる。

「……よくわかんねえ、俺は記憶がないんだ。その場合、どうすり

「やわかるんだ？」

これはジャスがなんとしてもプレイヤーに聞きたかった質問だ。自らとは何かという明確な答えが欲しかったからだ。

「記憶が無い？……お前、味覚や痛覚はあるか？」

「……ある。コイツの爺さんにハンマーでブン殴られた時は痛かったし、コイツの作ったスープは」

顎でエルリアを指す。

「その、まあ、旨かったよ」

「……ふうん、そうかい」

マヘリアの雰囲気が変わる。あからさまな落胆。

「じゃあ違うね。お前はゲームのNPCだ。プレイヤーに痛覚と味覚は無い。記憶喪失のプレイヤーならリアルでの記憶がなくなっても、味も痛みもないことにまず驚くだろうからね」

ゲーム、リアル、聞き慣れない言葉がジャスの興味を引く。

「お、おい、ちょっとまで、そのゲームとかリアルとかどういう意味だ？」

マヘリアの右手がゆっくりとジャスへ向く。

「説明するのもめんどくさいよ。NPCならどうでもいい、ホント
どうでもいい」

浮き上がる魔術紋様、瞬時に膨張する火球。熱風が吹く。

「ロストしやがれ」

「ッ！」

放たれる巨大な火球、しかしジャスも先程の戦闘で己の力を幾らか知ることが出来た。

「ふんッ!!」

気合いと共に放つ右拳打。捻りを加えられた拳が、特大の火炎を粉々に割り砕く。

分散する炎に炙られながらも、白銀の身体に損傷は無い。

——このままとっちめてやるッ！

拳打の勢いのまま、踏み込みをかける。距離を詰めるべく、炎の幕を振り払いながら前へ突っ込む。

——近づきやこっちの、アギヤッ!!

頭部に走る激痛、何かにぶつかった感触。

——何……だ？ 壁？

前方に半透明の壁が有った。半球状の防壁の向こう側ではマヘリ

アが余裕たっぷり腕を組んでいる。

「それはマジックウォール、防御魔術障壁よ！ ジャス、それには物理攻撃が通らないの！ 魔術攻撃じゃないと貫通しないわ！」

エルリアが叫ぶ。彼女の解説の通り、この壁は物理攻撃を防ぐ。しかも高位魔術師のマヘリアが扱うということはかなりの防御力があるということだ。

「説明乙だメスガキ！ つまり魔法を透過するってことはよお」

笑う美貌、再び右手に火球が灯る。

「こういうことだ！」

火球が壁を突き抜け、ジャスにぶち当たる。

「うおおっ！」

飛び散る熱により陽炎が発生、ジャスの視界が歪む。

「オラオラオラオラオラオラオラッ！！！！！」

連続する火球が壁を突き抜け次々と炸裂、ジャスを業火に包み込む。

——クソ、近づかなきゃ倒せねえ、でもこのままじゃ手詰まりだ。

マジックウォールによる安全地帯からの飽和攻撃、これがマヘリアの必勝の型。本来雇った兵士は魔術師がいた場合、足止めに使い、

場合によってはもろともに吹き飛ばすための捨て駒だ。

——得体が知れねえが、延々焼き続けりゃいつか焦げんだろ！

『プレイヤー』マヘリアこと折村忠吉（40）がVRMMOの世界に來たのは十年前だ。ネカマとして他のユーザーにアイテムを貢がせている最中、突如としてログアウトが不能となる。

運営者やリアルとの交信はまったく不能。ゲームが現実へ変化したログイン中のユーザーは『プレイヤー』となり、VRMMO世界ミドガリアを放浪することとなる。

初め、折田はこの状況を歓喜した。

準廃人と呼ばれるほどに強化したキャラクターは、トップクラスのプレイヤーとかち合わない限りは大抵の好き勝手が出来たからだ。しかしそれでも鬱屈が募ってくる。

協力するプレイヤーのいない中、満たされない味覚や不自然な痛覚は現実感の欠如として折田の精神をさいなんでいく。

その鬱屈の矛先を折田はNPCに向けた。この世界に置いてNPC達はプレイヤーのように無限の成長はしない。上限を固定されたレベルのままこの世界を唯一無二のリアルとして生きている。

その安穩に、世界を信用して生きる様が折田をいらつかせる。

——人間じゃないデータのくせに、道具の分際で！

折田にとってNPCは人ではない。自らの鬱積の払拭と、利益を確保するための道具だ。

「だからあッ！ 邪魔なオマエは灰になりなあッ！」

連射の速度が加速する。火球はもはやブドウのように連なりなが

らジャスに撃ち当たっていく。

——このままじゃマズい。

火球には耐えられるが、徐々に与えられる熱が蓄積しているのだ。

——何か、手は……ん？

視界の右端の項目、アイコンが点滅している。文字はgravity guard、activeがONへ変わった。

——これは！？

瞬間的に視界がたわむ。連続する火球がジャスを避けるように左右へ曲がった。

ジャスの周囲に、重力による障壁が発生している。

「なんだ！？」

驚愕の声を上げながらもマヘリアの連射は止まらない。いや、止めてはならないと本能的に悟ったからだ。

潰け込むスキを与えてはならない、そう思わせるほどジャスの雰囲気は一変した。

アイコンがもう一つ変化、項目はplasma reactor、文字はactiveからONへ。

——オオオオオッ！

背中、薄い板の重なる構造体、スラスタが大きくスライドして広がる。幾つもの板の隙間から光の粒子が溢れ出す。

拳にも光がまとわれる。輝きがより強まっていく。それは、断罪の拳。

「オッラアッ！」

無造作に奮われる一撃が、火球を貫き通し、マジックウォールを叩く。拳先が音速を突破、発生する衝撃波が吹き荒ぶ。しかし壁は破れない。

「バ、バカが！ 力でどうにかなるもんじゃ……なっ！」

見たものが信じられず声を上げるマヘリア。ジャスの拳の打ち当たった部分に大きな亀裂が走っている。

「オオオオオオッ！」

魂を震わせる叫びと共に、ジャスの右拳が幾度もぶち当たる。その度に亀裂は大きく、深く成長していく。

「こ、れ、でえ、ッ！」

トドメの手刀が突き立つ。同時に壁が崩壊。

「終わりだッ！」

振り抜かれる拳、壁は派手な散華の後、宙に消えて霧散していった。

「ッチイ！」

慌てて新しい防壁を張ろうと魔術を唱え始めるマヘリア、しかしそれはジャスには遅すぎる。

——させるか！

踏み込みと共に、背中から粒子が盛大に噴出する。急激な加速により、瞬間移動のようにマヘリアの眼前へ。

「ひっ！」

悲鳴より早く、マヘリアの右手を拳が打ち砕く。伝わる衝撃が肩まで吹き飛ばしていった。

——殺った！

右拳を引き、もう一度放つため構える。しかし、

「動くな！」

マヘリアの左手がジャスの後ろへ向けられていた。その先には動けないエルリアがいる。

「お前が動けばどうなるか、わかるな？」

ためらわず魔術を撃つ気だ。

「ジャス！ あたしに構わないで！」

斧を支えに立ち上がろうとするエルリア。どこまでも不屈の少女だ。

「そいつはあたしの両親の仇なんだ！　あたしはいいから、プレイヤ―を殺して！」

――コイツがエルリアの両親を殺した……

構えた拳を崩さず、ジャスはマヘリアを睨みつける。明確な殺意を向けた。

「うるせえんだよメスガキ！　NPCが親とか子とか人間みたく振る舞うんじゃない……」

光が一閃し、マヘリアの左腕が消え失せた。

「……あつ」

地面をマヘリアの左腕が転がりロストしていく。
ジャスの反射神経は既にマヘリアのそれを凌駕している。瞬く間に手刀で腕を切り落としたのだ。

「黙るのは……」

さらに横一閃に手刀が走る。

「貴様だ……ッ！」

胴体半ばから切断されたマヘリアが地面へ落下した。金髪を散らし転がる様は無様としかいいようが無い。

「てめえ、NPC、道具のくせに、」

腕の無い上半身だけになっても、マヘリアはまだロストしない。高レベルによる体力とスキル「部位破壊による過剰ダメージ放棄」、そしてプレイヤー独特の無痛覚がそれを成し遂げている。

ジャスは無言のまま、マヘリアの頭を掴み釣り上げる。自分の顔をよく見えるよう掲げ、質問を開始した。

「俺を見たことがあるのか？ 戦宙機とはなんだ？」

「……………」

ジャスを睨みながらマヘリアは沈黙する。頭蓋を掴む手に力を加えた。

「や、止める！ 今までロストしたプレイヤーからは連絡が取れないんだ！ この世界で死んだらどうなるかわからないんだよ！」

「だったら質問に答えろ」

圧力に屈し、とうとうマヘリアは質問に答え出す。

「……『お前』は知らない。だが、お前の外装には覚えがある」

「……………？ どういうことだ？」

「何も知らないのか？ お前の外装は『戦闘用宇宙空間航行機』略して戦宙機。まだデータしかない、実機では存在しない最新鋭の戦闘兵器だ！」

「戦闘、兵器？」

輝く粒子、重力による壁、空間索敵能力、あれらも兵器としての機能だったのか？

「なぜだ！ 見た目だけならともかく、性能までなぜ再現されている！ このファンタジーのゲームで、なぜお前のような兵器がそのままのスペックでこの世界にいる！」

「……知らねえよ。記憶が無いって言ってるだろうが」

本当にわからないとしか言えない。この身体のおそらくジャスは一割もつかんではない。

「まだ質問に答えてもらおうか、この世界は一体なんなんだ？ ゲームとリアルとは何のことだ？ プレイヤーとは一体どこから来た？」

ジャスの質問に、マヘリアは次々と答えていった。

プレイヤーがこの世界に現れるキッカケとなったログアウト不能化。

仮想現実のゲームと現実のリアル。

NPCとはゲームに居るデータに過ぎないということ。

そして、NPCをただの道具と見なす自身の価値観「エゴ」の正当性を。

やがて懇願するようにマヘリアがジャスへ語りかける。

「な、なあ、あんたやっぱりプレイヤーだろ？ 成長しないNPCじゃないだろ？ その能力の外装だって不正か何かで手に入れたんじゃないのか？」

すぐるようにジャスの反応を見ている。

「だったらどうなんだ？」

「だったら！ あんな道具共に従うんじゃない！ 人間なら人間の味方をしろ！」

激昂と共に怒鳴った。この男はどこまでも人間であるプレイヤーが優先されるべきだと信じている。

「……プレイヤー、お前から教わって、とてもためになった事が一つある。人間とそれ以外の見分け方だ」

淡々とジャスが呟く。その声は氷雪の如く、冷たい。

「そうだろう！ 俺の言うことは正し……ぐっ」

右手へ静かに力を込める。

「痛みを感じるのが人間、痛みを感じないのがプレイヤーだ。この世界の人間はNPCなんだよ。プレイヤーのほうが人間じゃないんだ」

マヘリアの頭部に光の亀裂が走る。

「い、いやだ！ 消えるのはいやだあああッ！」

「そしてお前は、人の痛みも自分の痛みもわからない、人間以外のクズだ」

握り潰される頭蓋、光とともに、マヘリアがロストしていく。

再び、ジャスとエルリア以外居なくなった場所で、荒野からの風が吹き抜ける。

チャプター4

「そんで、もう行くのかね、ジャス？」

「ああ、いつまでも世話になりっぱなしはシャクでな」

夕暮れの砂漠、採掘場の入り口で車椅子のマッコイが佇んでいた。砂漠を背景に、ジャスが立ち尽くす。灰のくたびれたツギハギコートに、ズタ袋のようなカバンを肩にかけている。

プレイヤーの襲撃から一週間、マッコイはマヘリアからレアメタルの場所を吐かせるための拷問を受けたが、軽傷だったようでもうすぐ車椅子はいらなくなるそうだと。

採掘場と工房では人や設備を含め決して少なくない被害がでたが、活動が出来ない程ではないらしい。

「しかし、プレイヤーに会いに行くってのは本当にかね？」

マッコイが心配そうにジャスの顔を覗く。

「何か俺について知っているやつがいるかもしれないからな」

それがこの一週間で出したジャスの結論だ。まだプレイヤーがいるなら、マヘリア以上にこの世界やジャスについて知っているヤツがいてもおかしくはない。

「……それがあんたの決めた生き方ならワシはなんも言わん。男の決めた事に口出しはヤボじゃからの」

「迷惑をかけたわりには大して恩を返せずに悪かったな」

マッコイは豪快に笑いながら首をふる。

「返せないのはワシらのほうじゃ。お前さんは恩人というのにのう」
「……別に大した事じゃないさ」

なんだかねで、ジャスはこの老人の明るさに救われている。

あの時もっと早く自分が動いてれば、多くを救えたかもしれない、そんな自責がジャスの胸を今なお締め付けているからだ。

「じゃあ、そろそろ行くな。所で、」

ジャスの視線の先には小山のようなリュックサックがある。

「なにやってんのよ、ジャス？ 早く行くわよ！」

リュックに隠れながらも、旅姿のエルリアが明るく呼びかけた。

「……あの小娘はなんだ？」

「いやー、お前さんが旅に出るって言ったたらついていくって聞かなくてなあ。ほら、女の決めた事に口出しするのもヤボだし」

「いや、そこは保護者として口出ししろよっ！」

「なによ！ 文句あんの！」

エルリアがジャスを見上げる。身長差がかなりあるため今にもひっくり返りそうだ。

「遊びじゃないんだ！ 爺さんの所に戻ってろ、小娘！」

「あんたには父さんと母さんの仇取ってもらった恩があるからね、ドワーフの男は義理堅いのが自慢なのよ！」

「……お前女だよな？」

「今は男女同権の時代よ！」

頭痛をこらえながら、ジャスはエルリアを食い止めようと思考を巡らした。

「大体、あんた貨幣とか物価とか役所の手続きとかわかってんの？ いきなりかなり現実的な質問をエルリアにされ、動揺する。」

「え、いや俺は記憶喪失だし……」

「そんなん旅できるとか本気で考えてんの？ 九割り野垂れ死によ！」

「ジャス、エルリアは勘定や商談はかなり上手いんじや。採掘場で取れた金属の卸もエルリアが決めておるからのう」

すかさずマッコイが孫娘を援護射撃。

「爺さん、それでいいのか経営は……」

「だから、あたし連れて行ったほうが絶対得よ！」

実際、旅慣れた人間を連れて行ったほうがいいのは当たり前だろう。最悪、ある程度ノウハウを吸収したら逃げ出せばいい。

「……しょうがねえ、行くか小娘」

「そこなくっちゃ！ 足引っ張らないでよね、ジャス！」

「そりゃ俺のセリフだよ！」

太陽が砂漠へ沈んでいった。

砂漠から、彼らの旅が始まる。

自らを知るための旅は、やがてこの世界の「人とは何か」という問いへと繋がっていく。

世界の中で人らしく暮らすNPC達と、

欠けた感覚で異邦者として刹那的に生きるプレイヤー、

どちらがこの世界の「人間」なのか、まだ答えはでていない。

だが、まだ彼らの旅は気楽な物ではない。

旅路の果て、彼が勇者と呼ばれるのか、魔王と呼ばれるのか、それはまだわからない。

今はまだ、わからない。

チャプター4 (後書き)

どうも読んで下さってありがとうございます。

とりあえず物語はここまででひとまず終了、また続きを考えた時は完結を解除して続きを乗っけたいと思います。

それではありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9975t/>

ジャス・ザ・ライトニング

2011年9月24日00時05分発行